

共感の負の効果—五十嵐論文へのコメント—

森 久美子

関西学院大学

はじめに

五十嵐 (2021) (以下, 五十嵐論文) では, ネットワークモデルの知見を中心に据え, 個人の孤独感と当該個人を取り巻く対人的環境の循環的影響過程が論じられた。そのような循環的過程の結果として, 孤独な個人が助け合いのネットワークから零れ落ちがちとなるという孤独感のもたらす問題についても鋭い指摘を行っている。

孤独感については五十嵐論文で十分な議論が尽くされているので, 本稿では孤独感とは逆の方向から助け合いの陥穽について議論することとした。具体的には, 社会関係の構築を阻害しがちである孤独感に対し, 個人間の連帯を促す感情である共感 (empathy) に着目する。共感とは他者との絆を強め, 「助け合い」のネットワークによって個人の生存を補助するという適応的意味を持ってきた。しかし共感に動機づけられた援助行動には全体への俯瞰的視点に欠けるという問題もある (Bloom, 2016; Loewenstein & Small, 2007)。本稿では, 援助対象となるターゲットに情動的に共感することがもたらす負の側面について考えてみたい。なお, 共感には, 他者の情動状態を自分のものとして経験する情動的要素, 他者の心的状態を理解し推論する認知的要素, 他者の状態を改善しようとする動機づけ要素が含まれる (Zaki, 2014, 2017)。本稿では, この3つをそれぞれ情動共有, 視点取得, 思いやりと呼ぶことにするが, 情動共有と思いやりの指標を統合している文献については両者をまとめてターゲットへの情動反応と記述している。

Identifiable victim effect (IVE)

苦しむ他者を前にして, 思わず支援の手を差し伸べることは誰しもあるだろう。しかしそのような支援の手は, 特定の個人にスポットライトが

当たった時に寄せられることが多く, 名もない多くの犠牲者には届きにくい (Schelling, Bailey, & Fromm, 1968)。Small, Loewenstein, and Slovic (2007) による実験では, 食糧不足で苦しむ子どもたちへの寄付を募る際に, ロキアという7歳の少女の写真とプロフィールを提示して寄付を求めた場合, アフリカ諸国の食糧危機についての客観的統計情報を示して寄付を求めた場合の約2倍の支援の申し出があった。少女のプロフィールに統計情報を追加するとこの効果は消失し, 平均寄付額は統計情報単独の場合と同程度になった。このような, 単独の特定犠牲者についての記述が, 統計的に表現された多数の犠牲者についての記述よりも多くの援助を促す現象は, identifiable victim effect (IVE: 邦訳としては「顔のある犠牲者効果」「特定可能な犠牲者効果」など) とよばれる (Jenni & Loewenstein, 1997)。

IVEは2つの面からとらえることができる。第一は, 犠牲者数が増加しても, それに追従して援助意思が柔軟に増加しないという「犠牲者規模への感度の鈍さ」である。これは, 「数」の違いが「有無」の違いに比べてインパクトが弱いこと, 犠牲者数が1を超えて増加してもそれに対する支援額は線型には増加しないことによる (scope insensitivity: Hsee & Rottenstreich, 2004)。この感度の鈍さは, 二重過程モデル (Kahneman, 2011; Stanovich & West, 2000) におけるシステム1の優勢によると説明される (Kahneman & Frederick, 2005)。多数の命の価値という想像困難なものについて判断する際に, プロトタイプである単独の命の価値について考えることで代替しようとするプロトタイプ・ヒューリスティックの働きにより, システム2がそれを修正しない場合には犠牲者数の増加が判断に反映されないというのである。

IVEのもう一つの面は, 単独個人が共感と援助を集める一方で多数の犠牲者には援助が集まら

ないという「犠牲者規模に伴う思いやりの衰退」(the collapse of compassion: Slovic, 2007; compassion fade: Västfjäll et al., 2014)である。犠牲者規模への感度の鈍さは、犠牲者数が増加しても援助が増えないというIVEの一側面をとらえていた。IVEのもう一つの側面は、Small et al. (2007)でもみられたように、多数の犠牲者の存在が、特定の個人としての犠牲者しか示さない場合に比べて援助を相対的に減らすということである。Kogut and Ritov (2005a)は、援助の効力を統制した上で犠牲者の数(1人・8人)と犠牲者の特定性(顔や名前などの情報が示されていること)を操作した。特定性がない場合には犠牲者数によって支援額は変わらなかったが、顔と名前が示されている場合、犠牲者集団への支援額は単独犠牲者への支援額よりも少なく、支援額と犠牲者に対する情動共有には正の相関がみられた。同様のより極端な事例としては、犠牲者が特定されている場合、ターゲットが1人から2人に増えるだけで情動反応の指標である表情筋の活動が低下し、それに伴って支援額が減ることも示されている(Västfjäll et al., 2014)。

これらの結果は、特定性が援助を促す効果(Small & Loewenstein, 2003)が単独の犠牲者に対して顕著に生じ、特定単独犠牲者への突出した支援増をもたらす、という特定性と単独性の交互作用から生じている。ここで特定性の効果を見れば、単独と集団の違いとしてIVEを位置づけると、思いやりの衰退は犠牲者への情動反応よりも援助の効力感などでよく説明される(Butts et al., 2019)。しかし単独犠牲者の特定性を操作して集団への支援を求めた研究では、特定性による支援増は、援助の効力感や責任感ではなく、情動共有や思いやりなどの感情反応の媒介効果により説明されることが明らかになっている(Erlandsson, Björklund, & Bäckström, 2015)。こうした知見を踏まえると、特定の単独犠牲者はその他の対象と比べて情動共有や思いやりを喚起しやすく、それが援助行動につながっていることが伺える。

分析的思考が援助に与える効果

ここで、直観的処理と分析的処理が「犠牲者規模への感度の鈍さ」「犠牲者規模に伴う思いやり

の衰退」というIVEの二側面に及ぼす影響を整理してみたい。犠牲者規模への感度の鈍さは、プロトタイプとしての単独犠牲者についての判断結果を多数の犠牲者に拡張する際の修正の不十分さから生じているので、システム2による分析的思考を行うことで緩和されるはずである。これを裏付ける結果として、事前に計算課題を行ったり感情的要素の少ない課題表現を用いたりすることで規模への感度が高まること(Hsee & Rottenstreich, 2004)、集団への支援を募る際に、先に一人の犠牲者への支援額を決めてから集団全体への支援額を決定させると支援額が高まること(Hsee et al., 2013)などが明らかになっている。これらの結果は、援助対象について分析的に思考することが、犠牲者数に応じた支援額の増加という功利主義的決定を導きやすいことを示唆している。

犠牲者規模に伴う思いやりの衰退について考えると、特定単独犠牲者への情動的反応が援助を促進していることから、分析的思考はターゲットへの突出した援助を抑制すると予測される。特定の単独犠牲者を統計情報と比較した研究では、計算課題によるプライミングを行った群(Small et al., 2007)や特性としての分析的処理傾向が高い群(Friedrich & McGuire, 2010)において、特定単独犠牲者への突出した支援が消失した。特定犠牲者同士を個人と集団で比較した研究では、両者を並列呈示して比較すること(Kogut & Ritov, 2005b)や、野生動物保護への支援において環境保護論者であること(Markowitz et al., 2013)が、特定個人(個体)への支援を弱めていた。

以上の知見は、直観的処理は特定個人への援助を促すが規模への感度を鈍くし、分析的処理は規模に応じた援助増をもたらすが特定個人への援助にはつながらないことを示している。それぞれの処理はともに何らかの援助促進効果を持つてはいるが、犠牲者個人と犠牲者集団ではそれぞれに援助を促す処理が異なり、一方が他方を抑制することもありうるのである(Erlandsson et al., 2016)。

共感に駆られた援助の負の側面

災害やテロなどの際、報道された被害者のもとに多額の支援が集まるというような事例は、一般には美談として語られる。しかし、分析的思考が

個人への援助を抑制し集団への援助を促進するというIVEについての知見は、ターゲットへの情動反応に依存した援助に潜む陥穽を示唆している。

第一の問題は、情動が、ターゲットとなる個人にスポットライトを当てることで全体への俯瞰的視点を失わせることである。情動に駆られた援助は、ターゲットを救うことが他の誰かに不利益を与えるというトレードオフに気づかせにくいのである。たとえば、ターゲットの情動を共有することは、他の人々を犠牲にしてもターゲットを医療サービスの待ち行列の上位に割り込ませる(Batson et al., 1995)。道徳ジレンマ課題では、犠牲者単独の写真がターゲットを傷つけることを避ける義務論的傾向を増加させ、認知的負荷が多数の利益を優先する功利主義的傾向を減少させた(Conway & Gawronski, 2013)。犯罪や不正な行為の被害者を特定したり被害者の情動を共有したりすることは、加害者への罰傾向を強める(Gino, Shu, & Bazerman, 2010; Paternoster & Deise, 2011; Pfattheicher, Sassenrath, & Keller, 2019)。ターゲットが競争課題を行っている場合、ターゲットと情動共有した参加者は、何も不正をしていない競争相手に強い痛みを与えてターゲットを有利にしようとした(Bufferon & Poulin, 2014)。これらの知見は、情動共有によってターゲットに焦点が絞られるために、競争相手や加害者を含む他の人々の利益の保護が視野に入らなくなることを示している。このようなターゲットへの公平性を欠く肩入れは判断の説明責任を課すことで減少することが示されており(Blader & Rothman, 2014)、熟慮が俯瞰的視点を取り戻すのに役立つことがわかる。

第二の問題は、情動に駆られることは、支援対象について知識や事実に基づいて手立てを講じることと相容れにくいということである。たとえば、経験を積んだ医師では他者が針刺激によって受ける痛みへの自動的共感反応が小さい(Cheng et al., 2007; Decety, Yang, & Cheng, 2010)。これは強い情動反応が認知資源を奪って医療支援の妨げにならないよう、自動的な調整が行われているためと考えられる。また、貧困支援プログラムの支援者に寄付を依頼する際に、特定個人のプロフィールにプログラムの効果を示すエビデンスを

追加すると、もともと少額しか寄付していなかった支援者は寄付をしなくなったが、大口の支援者では逆に寄付率も寄付額も増加した(Karlan & Wood, 2017)。客観的情報に支援意欲を削がれるのは良い気分を求める小口の支援者であり、出資が効率的支援につながることを求める者にとっては客観的情報は支援を促進したのである。環境保護論者では野生動物保護についてIVEが生じないという結果(Markowitz et al., 2013)も、問題解決を目指す者にとっては特定犠牲者への情動共有が意味を持たないと解釈できる。これらの知見は、支援対象の状況を改善し実質的な問題解決に導く支援は、情動に駆られた援助ではなく知識や事実に基づく冷静な援助から生まれる可能性を示している。

おわりに

共感とは、孤独感とは逆に他者との絆を強め、我々を「助け合い」のネットワークに包摂する働きを持つ。その重要性は言うまでもないことだが、それだけに頼った「助け合い」には、対象以外の人々の存在や支援の効率性が犠牲になるリスクが伴う。ターゲットへの援助だけに目を向けるのではなく、ターゲットを取り巻く人々を含めた包括的視点からの検討が必要である点は、五十嵐論文が孤独感研究について指摘している点とまさに同じといえよう。

文 献

- Batson, C. D., Klein, T. R., Highberger, L., & Shaw, L. L. (1995). Immorality from empathy-induced altruism: When compassion and justice conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1042.
- Blader, S. L., & Rothman, N. B. (2014). Paving the road to preferential treatment with good intentions: Empathy, accountability and fairness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 50, 65–81.
- Bloom, P. (2016). *Against empathy: The case for rational compassion*. New York, NY: Ecco.
- Bufferon, A. E. K., & Poulin, M. J. (2014). Empathy, target distress, and neurohormone genes interact to predict aggression for others—even without provocation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 40, 1406–1422.
- Butts, M. M., Lunt, D. C., Freling, T. L., & Gabriel, A. S. (2019). Helping one or helping many? A theoretical

- integration and meta-analytic review of the compassion fade literature. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 151, 16–33.
- Cheng, Y., Lin, C. P., Liu, H. L., Hsu, Y. Y., Lim, K. E., Hung, D., & Decety, J. (2007). Expertise modulates the perception of pain in others. *Current Biology*, 17, 1708–1713.
- Conway, P., & Gawronski, B. (2013). Deontological and utilitarian inclinations in moral decision making: A process dissociation approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 104, 216–235.
- Decety, J., Yang, C. Y., & Cheng, Y. (2010). Physicians down-regulate their pain empathy response: An event-related brain potential study. *NeuroImage*, 50, 1676–1682.
- Erlandsson, A., Björklund, F., & Bäckström, M. (2015). Emotional reactions, perceived impact and perceived responsibility mediate the identifiable victim effect, proportion dominance effect and in-group effect respectively. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 127, 1–14.
- Erlandsson, A., Västfjäll, D., Sundfelt, O., & Slovic, P. (2016). Argument-inconsistency in charity appeals: Statistical information about the scope of the problem decrease helping toward a single identified victim but not helping toward many non-identified victims in a refugee crisis context. *Journal of Economic Psychology*, 56, 126–140.
- Friedrich, J., & McGuire, A. (2010). Individual differences in reasoning style as a moderator of the identifiable victim effect. *Social Influence*, 5, 182–201.
- Gino, F., Shu, L. L., & Bazerman, M. H. (2010). Nameless + harmless = blameless: When seemingly irrelevant factors influence judgment of (un)ethical behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 111, 93–101.
- Hsee, C. K., & Rottenstreich, Y. (2004). Music, pandas, and muggers: On the affective psychology of value. *Journal of Experimental Psychology: General*, 133, 23–30.
- Hsee, C. K., Zhang, J., Lu, Z. Y., & Xu, F. (2013). Unit asking: A method to boost donations and beyond. *Psychological Science*, 24, 1801–1808.
- 五十嵐 佑 (2021) 孤独感と対人環境の再帰的構築, 心理学評論, 63, 403–417.
- Jenni, K., & Loewenstein, G. (1997). Explaining the identifiable victim effect. *Journal of Risk and Uncertainty*, 14, 235–257.
- Kahneman, D. (2011). *Thinking, fast and slow*. New York, NY: Farrar, Straus & Giroux. 村井章子 (訳) (2012) ファスト&スロー 早川書房.
- Kahneman, D., & Frederick, S. (2005). A model of heuristic judgment. In *The Cambridge handbook of thinking and reasoning* (pp. 267–293). New York, NY: Cambridge University Press.
- Karlan, D., & Wood, D. H. (2017). The effect of effectiveness: Donor response to aid effectiveness in a direct mail fundraising experiment. *Journal of Behavioral and Experimental Economics*, 66, 1–8.
- Kogut, T., & Ritov, I. (2005a). The “identified victim” effect: An identified group, or just a single individual? *Journal of Behavioral Decision Making*, 18, 157–167.
- Kogut, T., & Ritov, I. (2005b). The singularity effect of identified victims in separate and joint evaluations. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 97, 106–116.
- Loewenstein, G., & Small, D. A. (2007). The scarecrow and the tin man: The vicissitudes of human sympathy and caring. *Review of General Psychology*, 11, 112–126.
- Markowitz, E. M., Slovic, P., Västfjäll, D., & Hodges, S. D. (2013). Compassion fade and the challenge of environmental conservation. *Judgment and Decision Making*, 8, 10.
- Paternoster, R., & Deise, J. (2011). A heavy thumb on the scale: The effect of victim impact evidence on capital decision making. *Criminology: An Interdisciplinary Journal*, 49, 129–161.
- Pfattheicher, S., Sassenrath, C., & Keller, J. (2019). Compassion magnifies third-party punishment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 117, 124–141.
- Schelling, T. C., Bailey, M. J., & Fromm, G. (1968). The life you save may be your own. In S. B. Chase, Jr. (Series Ed.), *Problems in public expenditure analysis: Papers presented at a conference of experts held September 15–16, 1966* (pp. 127–162). Washington, DC: Brookings Institution.
- Slovic, P. (2007). “If I look at the mass I will never act”: Psychic numbing and genocide. *Judgment and Decision Making*, 2, 79–95.
- Small, D. A., & Loewenstein, G. (2003). Helping a victim or helping the victim: Altruism and identifiability. *Journal of Risk and Uncertainty*, 26, 5–16.
- Small, D. A., Loewenstein, G., & Slovic, P. (2007). Sympathy and callousness: The impact of deliberative thought on donations to identifiable and statistical victims. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 102, 143–153.
- Stanovich, K. E. & West, R. F. (2000). Individual differences in reasoning: Implications for the rationality debate? *Behavioral and Brain Sciences*, 23, 645–665.
- Västfjäll, D., Slovic, P., Mayorga, M., & Peters, E. (2014). Compassion fade: Affect and charity are greatest for a single child in need. *PLoS ONE*, 9.
- Zaki, J. (2014). Empathy: A motivated account. *Psychological Bulletin*, 140, 1608–1647.
- Zaki, J. (2017). Moving beyond stereotypes of empathy. *Trends in Cognitive Sciences*, 21, 59–60.